



女神なんて
お断りですっ。1

紫南
Shinan



レジーナ文庫

登場人物紹介



マティアス

ティアの前世の母。
『赤髪のディストレア』
と呼ばれる最強の
冒険者だった。



▲ザラン

冒険者。男気のある性格。
いじりがいがあるため、
よくティアにおもちゃに
されている。

ナルカ ▲

そうこうし
創工士。女というだけで
実力を認めてもらえば、
悔しい思いをしている。



カランタ

ティアに神判を告げた天使。
たまにティアの夢の中に現れ、
ヘタレっぷりを發揮する。



マティ

伝説の魔獸。
ディストレアの子ども。
ティアのよき遊び相手。



ルクス

ティアの護衛。いつもティアに
振り回されている
過保護で苦労性な青年。
冒険者としての実力は
かなりのものらしい。



前世

サティア

バトラール王国の王女。
民を苦しめる王族を滅ぼし、
15歳で命を落とした。
人々から『断罪の女神』と
崇められている。



シェリス

ハイエルフ。『ティアの婚約者』
を自称している。ティアに
負けず劣らずの魔術オタクで、
冒険者ギルドのマスター
でもある。



ティア

伯爵令嬢。神様から『女神
の力』を授かり、前世と同じ
世界に転生した。いくつもの
能力と膨大な魔力を持つ、
何もかも規格外な少女。

目次

女神なんてお断りですっ。

1

書き下ろし番外編

女神と呪いのドレス

女神なんてお断りですつ。

1

第一章 女神の目覚めと転生

気付いたら、ほんやりと覚醒^{かくせい}しないまま、その空間を漂つていた。

フワフワと気持ちのいい微睡^{まじみ}。ずっとこのままでいたいと思つてしまつ。

『お目覚めかな？ お姫様』

突然、そんな声が響いてきた。どこから聞こえたのかは分からない。知りたいとも思わない。だから、その声をスッパリと無視して、目を閉じた。

『えっ？ あれっ？ 無視？ 無視なのっ？』

(ハイ。無視します。おやすみなさい)

『えっ！ ちょつ、ちょつとつ。聞こえてるよね？ 起きてるよねっ？』

そう聞かれて、さつきの言葉は声に出しだろうか？ と疑問を覚える。(嫌です。今、いい感じになつてるので、最低でも三度寝します)

このダラダラした感じがたまらないのだと、是非とも分かつてもらいたい。

『いやいや。三度寝つて何？』

そこでようやく、相手にはこちらの考えが全て簡抜けになつてているのだと気付いた。(聞こえているのですね。なら、もう黙つてください。そうしないと呪いますよ)

『え……っ、どんな呪い？』

その声は、少し怯えたように震えていた。

(うるさい人ですね。仕方ありません。勝手に喋つてください。寝ながら聞いててあげます)

『…………うん、もうそれでいいよ……』
(ではどうぞ。おやすみなさい)

なかなか潔い奴だと感心しなくもない。だから、そのまま話し出した相手の声に、少しだけ意識を向けた。

『はい……では、始めさせていただきます……。ここは、狭間^{はさま}の空間です。サティア・ミュ

ア・バトラール。君は十五歳という短い人生を終えました。自らの命を絶つという罪と、親殺しという罪を背負い、神判の時まで、この狭間の空間で眠りにつく事になつたのです

霞がかったようにぼんやりしていた頭に、徐々に記憶が蘇つてくる。

——バトラール王国。

その国の第三王妃の子として、自分は生まれた。

『サティア姫。君が亡くなつた日、バトラール王国も滅びました。王家の血を引く者はもちろん、その縁者に至るまで、誰一人生き残つた者はいません』

父王は、自身が王になる際に、身内を全て殺してしまつていた。王妃であった母は、サティアが十歳の時に亡くなつてゐる。だから王族と呼べるのは、他の王妃五人と、その子ども八人、そして父王を含めた十四人。その全員の最期を看取つた後、サティアは自ら命を絶つたのだ。

『そう、君が最後だつた。全てが君の書いたシナリオ通りに進み、完璧な結末を迎えた』

サティアは、ゆっくりと目を開けて思い出す。

彼女が書いたシナリオとは、民衆で組織された反乱軍を率い、王家を滅ぼすというもの。そして犯した罪とは、身内を殺して王家の血筋を絶やし、国を滅ぼした事だ。

完全に覚醒した頭で、その事實を反芻する。そして、サティアは緩やかに自嘲の笑みを浮かべた。

ここまで来たら、自身が作り上げた役を最後まで演じようと思つた。

残酷で、滑稽な姫。血に塗れた愚かな子として全てを終えるべきだろう。

「罪を償えと言うのね。ふふつ、どんな地獄が待つてゐるのかしら。楽しみだわ。さつきと墮としたらどう?」

目は開いているものの、声の主を探す気は起きない。

自棄になつてゐるサティアの前に、突如光が集まつてきた。
眩しさに耐えかね、咄嗟に目を腕で覆う。

『ようやく起きたね』

すぐ近くから声が聞こえ、驚いたサティアは腕を下ろす。

そこには、サティアと同じくらいの歳の男の子が、笑みを浮かべて立つてゐた。

しかし、はつきりと見る事はできない。男の子は全身真っ白な服装をしているために、辺りの光に半ば同化してしまつてゐるのだ。

（なんか、胡散臭いのが来た……）

それが正直な感想だつた。男の子は物語に出てくる王子様か、もしくは人々が思い描く天使そのものといった姿をしてゐたからだ。

笑顔から一転、情けない表情になつた男の子は、綺麗な顔を下に向けた。サティアの

言葉に落ち込んだらしい。

(そうか、聞こえてるんだよね。とりあえず挨拶しとこ)

そう思い、サティアは声に出して挨拶した。

『ごきげんよう。胡散臭い方』

『つ！ わざわざ口にしないでつ！』

『だって、聞こえちゃったんでしょ？ もう誤魔化しようがないじゃない』

『……君、本当にお姫様だったの……？』

男の子は若干疲れたような、呆れたような顔で確認した。

その様子を見て、サティアは真顔で答える。

『一応、第四王女として生きてましたけど、それが何か？』

『……うん……間違いないじゃないって分かってるんだけどね……』

姫らしさの欠片もないというのはサティアも自覚しているので、別段腹は立たなかつた。
「元々姫なんて柄じゃなかったもの。そんな事より、早く神判を受けたいんだけど。あなたが神様……じゃないわよね？ 神様にしては、威厳がないし……ただの使い走り？」

（だって、こうやつて思つただけで分かっちゃうんでしょ？ 無駄にキラキラしてて胡散臭いとか、絶対ナルシストだとか、自分で王子様みたいだと思つてるんだろうなあとが、全部聞こえちゃつてるんでしょ？）

『つ！ ……聞こえてます……すみません……つ、もう勘弁してくださいっ』

男の子は青い顔になつて膝をつき、絶望を体現した。

それを見て満足したサティアは、次はどうしてやろうかと考える。男の子はそれを感じ取つたらしく、ガバッと顔を上げた。
『待つてつ、これ以上はやめてつ。こつちの用件を聞いてつ』

まるで浮気がバレた夫のようだな……と思つたが、可哀想なのでやめておいた。
仕方なくサティアは、大人しく頭を空にして待つ。

『そういえば、自己紹介がまだでした。僕はカラント。天使です』

（やっぱし胡散臭い奴だつた）

思わずそろ考へてしまつたサティアに、男の子は更にダメージを受けたようだ。

『ぐはつ……！ ああもう……つ、無視して進めさせてもらいます……』

どうやら、この短時間で打たれ強くなつたらしい。

自称天使のカラントは、気丈にも言葉を続けた。

『サティア姫。あなたが亡くなつてから、五百五十年が経ちました。本来ならば、身内殺しや自害といった罪を犯した場合、重い罰が与えられます』

サティアとしても、それは重々承知の上だ。

だが、次に告げられた言葉は、予想だにしないものだった。

『しかし、サティア姫。あなたの死は多くの人々に悼まれ、たくさんの祈りが捧げられ

たのです』

その言葉の意味を理解した瞬間、サティアは愕然とした。

「……は？」

サティアの目的は、民衆を苦しめた王族の、慘めな最期を演出する事。だから、反乱軍に接触する際も、自身が王女だとは知られないようになつた。城に住む者だとしか言わず、特徴的な髪や瞳の色をえていたのだ。

よつて、反乱軍を導いたのがサティアだと知る者は、一人もいないはずなのだが……『混乱してるね？』君の正体に気付いた者達がいたんだよ。彼らは君の書いた筋書きを、必死で変えようとしていたんだ』

先程の仕返しのつもりなのか、カラントは嬉しそうな笑みを浮かべて言った。

つまり、全てがサティアの書いた筋書き通りにいつたわけではないという事だ。衝撃を受けて黙り込むサティアに、カラントは更なる爆弾を投げつける。

『驚いたかい？ 今では、君を主人公にした物語があるほど人気なんだよ？』

『なんだそれはつ。残らず焚書にしてくれるつ』

サティアは残酷な王女を演じるのも忘れ、乱暴な口調で叫ぶ。死んだ後に好き勝手されるのは、サティアにとつてそれほど腹の立つ事だつた。

それにもかかわらず、カラントは楽しそうに言う。

『意味ないよ。だつて、親が子どもに読み聞かせる読み物ベスト3に入つてるんだからねつ』

『知名度高つ！ つたく、どこの馬鹿が作りやがつた!?』

そう言いつつ、そんな事を仕出かしそうな人物を、必死で思い浮かべていた。

『ともかく。そんな物語のおかげで、君という存在は、なんと神格化されましたあ～。

おめでとうござります』

（……何言つてんの、こいつ）

一人テンションを上げて拍手するカラントに、サティアは顔を思いつきり聾めた。

『あれ？ 嬉しくない？ 君は今やあの世界で、「断罪の女神」と呼ばれて信仰されて

いるんだよ？ すごいでしょ？』

『だ……だんざい……』

あまりにも恥ずかしすぎる呼び名に、サティアは顔を真っ赤にして叫ぶ。

『最初に言った奴は、どこのどいつだ！』

『さあ、もう分かりません。ですが、そのおかげで罪は大幅に軽減され、君には「転生

という神判しはんが下されました』

カラントは、とびきりの笑みを浮かべて言つた。

だが、サティアはその意味をすぐには理解できない。

『……今、『転生』って言つた？』

『そう。しかも、ただ転生するだけではないよ？ 君の魂は、女神としての大きな力を秘めている。この五百五十年の間に人々から祈りとして捧げられた、絶大な力だ。その力をもつて、あの世界にもう一度生まれ、世界を平和に導いてほしいんだ』

『なんか、すごい大きな事言われた！』

カラントの口調の軽さに騙されそうになつたが、言葉の内容は重かつた。

なのに、彼は自信満々に答える。

『大丈夫だよ。君ならきっとできる』

「いい感じにまとめたって思つてるだろうけど、断る！」

きつと、とてつもなく面倒臭い事になる……サティアはそう直感していた。

『いや、これ一応、神判だし……拒否なんてできないよ……？』

『……やり直してもらつて』

『だから、できないって！ あつ、もう時間です』

「はあ!?」

その時、サティアの体は一瞬にして光に包まれた。

（何つ!?）

混乱の最中さなか、カラントの声が頭に響いてくる。

『さあ、転生の時です。……大丈夫。近いうちに会いに行くからね』

そう言つた後、カラントは聲音を真剣なものに変えた。

『……最後に。国が滅んだのは、君の罪ではないよ。王家の血を絶やし、結果的に国を滅ぼしてしまつたけれど、それは君の罪ではない』

（え……？）

サティアには意味が分からなかつた。
けれど、カラントは構わぬ続ける。

『君の新しい人生には、たくさん試練が待っている。でも、君になら乗り越えられるつて信じているよ。どうかいい人生を……』

その声を最後に、サティアの意識が遠のいていく。体の感覚がなくなり、視界は真っ白で何も見えない。

そんな中、サティアは最後の力を振り絞つて叫んだ。

「今度会つたら、ぶつ飛ばすっ！」

そこでツツリと意識が途切れ、何も分からなくなつた。



「ねえ、見て。今笑つたわ。楽しい夢でも見てるのかしら」

「きっとそそうだね。あつ、また……」

「ふふつ、可愛いわ……」

「うん。いつまでも見ていたくなるね。まるで……そう、天使……」

『天使』……？ 『天使』だとツ？

サティアは目を開けて飛び起きた——つもりだつた。

だが実際は、妙に重い瞼をこじ開け、体をビクリと動かしただけにすぎなかつた。
（えつ、あれ？ なんだか視界が悪い。ぼやけて焦点が定まらない。なんで？）

手を動かしてみたら、なんとか動いた。けれど、なぜだか体が全体的に重く、思うようには動かない。指を動かそうにも、握った手の平を開くのにすら苦労する。まるで自分の体ではないみたいだ。

（なんだろ？ なんでもちゃんと動かないの？ あつ、もしかして夢？ 夢があ。なら仕方ないよね。うんうん。夢の中だと、すつごく頑張つてイメージしないと走れなかつたりするもんね。かと思えば、簡単に空を飛べたりね。なんにせよ、夢なら仕方ないよ）

サティアは、無理やり気持ちを落ち着かせてみた。

それでもう一度指を動かそうとしたが、上手くいかない。手を開こうと思つても、逆に握り締めてしまう。指を一本ずつ動かそうとしているのに、全部一緒に動いてしまうのだ。

そのうち、サティアの頭に嫌な仮説が浮かんできた。

（まさか、すごく太つてゐるせいで動けないとか？ このなんとも緩慢な感じがするのは、そういう事？）

そう思えば納得がいく。けれど、信じたくない。

(いやだッ！ どうしようつ？)

不安が急激に高まり、サティアは泣きたくなつた。

「おぎやあつ、おぎやあつ」

そんな泣き声が口から飛び出す。

すると、すぐ近くから人の気配がした。

「あらあら、どうしたの？」

若い女性の声が、頭の上に降つてくる。

「大丈夫よ？ ほおら、よしよし」

ふいに体が浮く感覚があり、背中に温もりを感じた。

「つ……ふえつ……」

ホツとする温かさ。優しく揺らされる体。

胸いっぱいに膨らんでいた不安が一気に消え、意識がすうつと遠のいていく。

「ふふつ、お母様が傍にいますよ。だから、いい子でお休み……」

「お父様もいるからね。可愛い、可愛いティア。たくさん眠つて、早く大きくおなり」

若い男性の声と、サワサワと頭を撫でられる感覚。

(あつたかい……それに……『ティア』？ なんだか懐かしい……)

遠のいていく意識の中で、前世の母の声が聞こえた気がした。

自分が赤ん坊になつていると氣付いたのは、そんなやり取りを十回以上続けてからだつた。

なんでもつと早く氣付かなかつたのかと、サティアは自分を何度も責めたが、それも今ではいい思い出だ。

首が据わらない不安定な時期を過ぎ、寝返りを打つという重大イベントも乗り越えた。そして、ついに立ち上がる——前に手足を強化せねばと、今はハイハイを猛烈に練習している。

そんな中、視界もだんだん良好になつてきている事に気が付いた。

(だから、気付くの遅つ……)

サティアは自己嫌悪に陥りながら、ゆっくりと周りを観察する。

(結構広いベッドだよね……。横に三回転がつても余裕じゃん……)

コロコロ。

ベッドの端から端まで転がり、広さを実感する。

ヒヨイツと体を起こし、ベッドに座つてみる。

小さい体は楽しいものだと、最近よく思う。

まず、身が軽い。こうして起き上がるようになる前は、自由に動かない体が煩わしかったのだが、今は逆だ。少し反動をつけただけで起き上がる事ができるし、転がる事もできる。たまに力加減を間違えて、半回転するつもりが一回転してしまつ事もあるのだ。

(指……)

サティアは左手の指を右手で掴んで、曲げてみる。

(つ……まだ難しい……)

必死で集中しても、一本ずつしか曲げられないのだ。たとえるならば、針に糸を通すのと同じくらい難しい。

(足は……つ)

足の指なんて、もっとどうにもならないだろうが、ためしに掴んで弄つてみる。

あつ、と思つた時には遅かつた。

夢中で掴んだり曲げたりしていたらバランスを崩し、コロンと後ろにひっくり返つてしまつたのだ。

そこへ、おつとりとした女性の声が聞こえてきた。

「あらあら、ティアちゃん。また頭を打つたらどうするの？」
(はつ、そだつた。後頭部、大事！)

実は数日前にも同じ事をして、ベッドの柵に後頭部を打ちつけてしまつたのだ。

あの時は何が起つたのか分からず、泣いてしまつた。痛かつたからというよりも、自分の身に起きた事が理解できない不安でいっぱいだったのだ。

それを思い出しても少々落ち込んでいると、不意にヒヨイツと抱き上げられた。この感覺は、何度も味わつても楽しい。

(まう……)

「ふふつ、ご機嫌ね。さあ、ご本を読んであげましょう」

そう言つて、彼女はサティアをどこかへ運んでいく。

この若い女性が、今生での母親だ。そして、「ティア」というのがサティアの新しい名前らしい。前世の愛称がティアだつたので馴染み深く、これはありがたい。
ソファに腰掛けた母の膝の上に、サティア改めティアは座らされる。ふと見上げると、母の小さくて綺麗な顔が目に入った。フワフワした金色の髪を器用に編み、前に垂らしている。

その髪を掴みたくなる衝動を必死に抑えながら、ティアは母の翡翠色の瞳を見つめた。

「ふふっ、今日はドラゴンのお話よ」

目の前に開かれた本には、ドラゴンの挿絵が描かれている。長い首に小さな頭。ひまく飛膜ひまくのついた大きな翼を背に生やし、力強い手足を持っていた。

「ああごつ」

この世界には、色々な生き物がいる。またティア達のような『人族』以外にも、様々な種族が存在していた。高い魔力を持つエルフや魔族、工芸や鉄工が得意なドワーフ、獣の耳や尻尾を持つ獣人族、武芸に長けた竜人族などが、それぞれの国を作つて生きているのだ。

「ええ、ドラゴンよ。お母様も本物は見た事がないけれど、冒險者ギルドにいる飛竜よりも大きくて強いんですって。この国から山を三つ越えた先にある渓谷に住んでいると言われているけど、本当のかしらね？ ティアちゃんが大きくなつたら、お父様に頼んで連れていくてもらいましょうか」

「あうつ」

飛竜は、家畜化された小型のドラゴンだ。前世で暮らしていた城で飼われていたので、ティアも見た事がある。しかし、野生の大好きなドラゴンは一度も見た事がなかつた。

(見たい見たいつ。でも、今はこの本読んでつ)
その意思が母に伝わったのか、すぐに読み聞かせタイムに入つた。

(ふむふむ。なんとか文字は読めるようになつた)

母の声を聞きながら 文字を目で追う。
この文字を最初に見た時は、とても驚いた。言語 자체は前世の時代から世界共通語となつており、今も変わつていらないものの、文字の形はこの五百五十年の間に大きく変化を遂げたらしい。

当時のものをベースにしているようだが、ほとんど別物になつていて、ティアは大いに焦つた。恐らく他種族との交流によつて変化したのだろう。

その知識は、今の時代の文字を学ぶ上で、大いに役に立つた。無駄に博識だった前世の母に感謝する今日この頃だ。

「おしまい。ふふっ、楽しかつた？」

「だあ」

微笑む母を見上げて、ティアは返事をする。
その時、視界の端を、何かがふつと横切つた。

「う？」

母が座っているソファの横に目を向けると、そこに大人の手の平に乗る大きさの子どもがいた。五歳くらいの、見るからに無邪気な子どもだ。

（ええっと……ああだ。『精靈』だ。資質のある人にしか見えないとかいう、レアなやつ）前世では見えなかつた精靈が見え、ティアは驚くより先に呆然としてしまつた。

鮮やかな緑色の髪を二つに結つた精靈は、髪と同じ色のシンプルなワンピースを着ている。そこから小さくて短い手足が覗いていた。胴も短くて、三等身ほどしかない。髪の毛とワンピースは、まるで陽炎のようだ。髪の毛は、まるで陽炎のように大気に揺らめいていた。

その精靈は、ソファの端で足をブラブラさせながら、笑みを浮かべてこちらを見ている。

「ティアちゃん、どうかしたの？」

母には精靈が見えないらしく、不思議そうに首を傾げていた。

（お母様には見えないんだね。わあい、特別つ）

なんて喜んでみたが、精靈が見える事は、必ずしもいい事ではない。

この世界には、魔力と呼ばれる力がある。その源は魔素と呼ばれるもので、目には見えないが、大気の中に自然と発生するらしい。

その魔素から生まれるのが精靈だ。生まれる場所や素質によつて異なる属性を持ち、

個別の姿と意思も持つている。精靈が見えるという事は、普通の人よりも魔力をを感じやすいという事。それは、魔術師には欠かせない資質だ。

だが、他の人に見えないものが見えるというのは、それだけで嫉妬や恨みを買いやすくなる。人それぞれ違つていて当たり前だと言いながらも、何かと比較して優劣をつけたがるのが人という生き物だ。五百年と少し経つたくらいで、それが変わつているとは思えない。

（私も迫害の対象があ。嫌だなあ……）

前世の時代において、精靈が見える者は『精靈術師』と呼ばれ、忌み嫌われていた。

彼らは精靈と意思の疎通が可能なので、その力を扱いやすくなる。だが、彼らが嫌われる原因はそれではなく、精靈の声が聞こえるという事にあつた。精靈は、様々な場所に存在している。そのため、聞かれたくない話を彼らに聞かれている可能性がある。精靈の声を聞く事ができる精靈術師にも、その話が筒抜けになつてしまふのではないかと、精靈が見えない者達は不安に思うのだ。

それは実際、その通りなのである。だからこそ、精靈術師とバレたら最後、村八分にされるのが当たり前だつた。

前世の母の友人にも、精靈術師がいた。旅の途中で城に立ち寄つたその友人は、たと

え人族の国を追われても、精靈達がいれば困る事はないと言つて、幸せそうに笑つてい
た。だが、前世の母の友人は皆変わり者だったので、その言葉は参考にはならないだろう。
精靈術師とは、精靈に愛された者。そして精靈は、世界そのもの。つまり精靈術師は、
世界に愛されているのだ。

ただし、同族からは嫌われる。

(まあ、今悩んでも仕方がないか。とりあえず、よろしくね)

精靈を見つめながら、ティアは心中で呟く。すると、その意思を読み取った精靈が、
満面の笑みを浮かべて答えた。

『ねつ』

こうしてティアは、この問題を先送りする事にしたのだった。

精靈との初めての出会いから、数日が経つた。

「あうあいう。おうあい」

今、ティアは部屋に一人である。

とはいっても、もちろんベビーベッドの柵の中にいるのが……

先程から何をやっているのかといえば、言葉の練習だ。言葉の意味は分かるし、文字

も読めるようになつた。けれど、口に出して言えない。

(赤ちゃんって疲れる……)

何しろ、半日起きているのも難しいのだ。情報をある程度頭に入れると、制限がかかってよう眠くなる。動き回つている最中でも、ご飯を食べている時でも、限度を超えると急に瞼が落ちるのだ。

(面倒臭い。早く大きくなつてやるつ)

ベビちゃんライフは思いのほか苦労の連続で、ストレスが半端ない。

だが、そんな荒んだ心を癒やしてくれる存在が傍にいた。

『ご心配は無用ですわ、女神様。たとえ転んでも痛くないよう、風で受け止めますから』
ラリとしており、緑色の長い髪をいくつものリボンで束ねて前に垂らしている。

『疲れたら、お水をお出ししますわ。頑張つてくださいな』

今度は綺麗な少女が言つた。先程の女性よりも少し幼く、流水をイメージさせる青くて長い髪を、二つに結んでいる。

(綺麗なお姉さん、大好きですっ)

今ティアを見守ってくれているのは、二人の精霊だ。ただし、他の小さな精霊達とは違ひ、人と同じ大きさをしていた。

そのうちの一人は、不意にストレスが爆発してジタバタと暴れるティアの安全を、確保してくれている。

そしてもう一人は、大声を出しすぎて疲れたティアに、喉潤すための水を提供してくれていた。

あの小さな精霊との出会いをきっかけにして、ティアのもとには、様々な精霊達が遊びに来るようになつたのだ。

『かぜのおうさま、みずのおうさま。じかんだよお』

小さな精霊の一人が、お姉さん達に告げる。

すると二人は、窓の外に視線を向けた。

『あら、もうそんな時間なの?』

『つい夢中になつてしまひましたわね。女神様、そろそろお休みになつてくださいませ。また明日参りますわ』

(うん、ありがとね)

二人のお姉さんは、小さな精霊達になんらかの指示をする。そしてティアに向かつて

頭を下げるといつた。

なんと彼女達は、それぞれの属性を司る『風の精霊王』と『水の精霊王』なのだ。

小さな精霊達が、ティアの存在を二人に伝えたらしい。精霊王は本来、決して人前に姿を現さないにもかかわらず、わざわざ会いに来てくれたのだ。それからというもの、自ら進んで『女神のベビーシッター』をしてくれている。女神様つてすごいんだなと、まるで他人事のように感心するティアだ。

なんにせよ、正直とてもありがたい。何せ言葉を話す事ができなくとも、精霊達には意思が通じるのだ。あの自称天使のカラシタと同じく、思つただけで伝わる。それは今のティアにとつて、何よりも嬉しい事だった。おかげで最近の世界情勢なんかも、物知りな精霊王達から聞く事ができる。

初めは感激しすぎて、二人に向かつて拝んだあと、頭を下げて額をベッドに押しつけた。他の人が見たら、かなり異様な光景だつた事だろう。それで、着実に成長はしているはずだ。

精霊王達が出ていった窓の外を、ティアは羨ましそうに見る。

そんなティアの心情を汲み取ったのか、目の前をフワフワと漂う精霊が話しかけて

きた。

『おさんぽしたい?』

(うん。 そこで走り回って、 体力つけて、 今度こそ冒険者になるの)

そう、 それが今度のティアの夢だった。

前世の母が昔、 かなり名の知れた冒険者だったのだ。 だが、 王であつた父と恋に落ち、 王妃になつた。 そんな母から、 前世のティア——サティアは剣技や体術を教わり、 身を守る術も習つた。

そしていつしか、 冒険者になる事を夢見ていた。 王女の身では不可能だと分かつていても、 サティアには諦める事ができなかつたのだ。 結局、 その夢は叶わなかつたけれど、 『ゆめ?』

精霊に問い合わせられ、 そุดと頷く。 たとえ叶わなくとも、 叶えようと努力する。 それが夢というものだ。 謹めたら、 その時点で夢ではなくなる。

サティアは母の冒険者時代の話を、 周りの人達からよく聞かされていた。 世界中を自由に飛び回り、 立場など気にせず、 自身の信じる道を貫く。 貴族は言うまでもなく、 時には王族相手にも遜る事なく立ち回る。 そんな話を聞きながら育つたのだ。

前世の母はサティアにとつてヒーローであり、 憧れの存在だつた。 だが、 成長するに

つれて王族としての立場を理解させられていく。 それがサティアには煩わしく思えた。 自分の力で道を切り開き、 時には世界さえも変えてしまう冒険者。 ティアはずつと、 それに憧れ続けている。

そう、 王族や女神としてではなく、 ティア自身の力で世界を見て、 変えたいのだ。 二度と運命などに翻弄されたくない。

そんな熱い思いを胸に、 ティアはゆつくりと目を閉じた。

その日の真夜中、 ティアは何かがおかしいと感じて目を覚ました。

『たいへんっ、 たいへんっ』

精霊達の声は聞こえるのだが、 視界が暗くて何も見えない。 いつもなら夜中に目が覚めるが、 光の精霊が明かりをくれるのに、 それもない。 その上、 なんだか閉塞感があつて息苦しかつた。

バタバタと手足を動かすと、 布みたいなものに触れた。 どうやら、 布に周りを囲まれているようだ。

(つまり、 袋の中?)

「おい、起きたんじゃないか？」

「いや赤ん坊だぞ？ 起きたら泣くだろ」

「そりやそろか。起きる前に、さっさと届けちまおうぜ。子どもの泣き声は苦手なんだ」
ガタガタという音から察するに、馬車の中にいるらしい。そのわりに揺れが少ないのは、背中の下に柔らかい布が重ねて敷いてあるからだろう。

(誘拐？ ……精霊ちゃん、犯人は二人？)

まずは状況を知りたい。こんな状況にもかかわらず、冷静な頭でティアは精霊に問い合わせた。

『ふたり。ヒゲもじや』

『ヒゲもじや』(ね)

会話の内容から考えるに、その手のプロというわけではなさそうだ。精霊達に頼めば、返り討ちにする事も可能だろう。

『たたかう？』

『たいじする？』

『もやす？』

(いやいや、それはさすがに……。ってか、火の精霊ちゃんもいるんだね……)

精霊達はそれぞれの属性によって髪や服の色が決まっているので、見ればすぐに分かる。風なら緑。火なら橙。土なら茶。水なら青。しかし、袋の中にいる今のティアには、見えるはずもなかった。

(燃やしちゃダメよ？ このまま大人しくしておくの。彼らの親玉を知りたいしね)

『わかつた』

『あとでたたかう』

『あとでもやす』

(そう。私がいいって言うまで手を出しちゃダメ。よろしくね)

『『ねつ』』

これでひとまず心配はいらない。ティアは目を閉じ、その時を静かに待つ事にした。
両親は気付いているのだろうか。気付いていなければいいなどティアは思う。あの優しい両親を悲しませたくないからだ。

しばらくすると、馬車が停まった。眠ったふりをしていたら、抱え上げられる感覚があつた。相手がティアを恐々抱いているのが伝わってくる。
(下手くそ。普通の赤ちゃんなら、大泣きしてるからね。……って、連れさられる時に気付かなかつたなんて……不覚だわ……)

自己嫌悪を覚えながら運ばれていると、やがてどこかに下ろされた。
そして、馬車にいた二人とは別の男の声が聞こえてくる。

「連れてきたか」

「ええ。ご指示通り、ヒュースリー伯爵の子どもです」

ヒュースリー伯爵というのは、ティアの父の事だ。この男達はそれを知った上で、ティアを攫つたらしい。

ゆっくりと布を剥がされる感覺があり、ようやく外の空氣を感じられた。うつかり目を開けてしまいそうになり、ティアは必死に我慢する。

「赤ん坊ではないか！ 伯爵の息子は、もうじき十歳になるはずだぞっ」

その言葉に、ティアは少し眉根を寄せる。

（息子？ 何言つてんのこいつ）

だが、そう思つた時、不意に両親の寂しそうな顔が頭に浮かんだ。二人がふとした瞬間に見せる、あの表情。もしかしたら、ティアには兄がいて、なんらかの理由で両親とは別に暮らしているのかもしれない。

「えつ、そんなつ。間違いなく伯爵の屋敷から連れてきましたっ」

「言い訳をするなっ。それが本當だとしても、どうせ使用人の子だらうつ。さつさと処

分しろっ。報酬は無しだっ」

一方的に怒鳴つた男が、部屋を出ていこうとする氣配がした。それを誘拐犯達が、慌てて引き止めている。

男の言葉について考え込んでいたティアだが、その騒ぎに思考を中断させられた。（まったく、うるさいなあ……そんな大声出すなら、泣いちやうよ？ 鍛えまくつた腹式呼吸から成る泣き声を披露しちやうよ？）

目を覚ますタイミングとしても、悪くない。

『ないとく？』

『おおこえだす？』

『もやす？』

（とりあえず泣いてみるから、燃やすのは後。……さて、それではティアちゃん、いつ

次の瞬間、ティアの泣き声が盛大に響き渡つた。



その頃。ヒュースリー伯爵家では、ティアが連れ去られたという事実がようやく発覚していた。

「旦那様つ、しつ、失礼いたしますツ」

「どうしたんだい？ こんな時間に、そんなに慌てて」

この屋敷の主——ファイスターク・ラトル・ヒュースリーは、読んでいた書類から顔を上げ、乱暴に開けられたドアの方に目を向けた。

まだ三十代半ばという若さでありながら、それに似合わぬ落ち着いた雰囲気を持つファイスターク。見るからに温和そうな顔立ちをした彼は、癖のない長めの髪を後ろで束ねていた。

「リジット、君がそんなに慌てるなんて珍しいね」

ヒュースリー伯爵家の家令、リジット・バーンズは、普段は一切表情を変える事がない。夜になつても黒い執事服には皺一つなく、白銀の髪も整つたままなのだが、今日はどちらも乱れてしまっていた。

「お嬢様がつ、お嬢様が消えましたつ」

「つ！」

ファイスタークは何も言わずに部屋を飛び出した。目指すは当然、愛しい娘の部屋だ。真夜中だというのに、屋敷の廊下には煌々と明かりが灯されている。しかも、既に眠つていたであろう使用人達が、慌ただしく駆け回っていた。

彼らはランプを片手に、一つ一つの部屋を見て回っている。そんな使用人達に感謝しつつ、ファイスタークは走つた。

「ティアつ！」

ドアを蹴破る勢いで部屋に飛び込むと、妻のシアンがベビーベッドの横で放心していた。

「シアンつ……」

ファイスタークはシアンに駆け寄り、そつと抱き寄せる。震えているのはシアンなのか、それとも自分なのか。それすら分からぬほど動搖していた。

体の弱いシアンは、今日も日が落ちる前にはベッドに横になつていていた。自力で起き上がる事すら難しそうだったのに、ベッドから脱け出してきたままの格好で床にへたり込んでいたのだ。

「ティア……、ティアあああっ」

ファイスタークの体温を感じて意識を取り戻したらしいシアンは、顔を両手で覆い、涙を流して叫んだ。そんなシアンをきつく抱き締め、ファイスタークは唇を噛む。

このような状況を、二人は嫌というほど経験していた。ヒュースリー家の長男——つまりティアの兄が、過去に何度も誘拐されたからだ。

だがこんな事は、二度と起きないはずだった。原因は全て排除したつもりだったのだ。その時、リジットが勢いよく部屋に飛び込んできた。

「旦那様……何者かが侵入した形跡を見つけました。それと、乱暴に走り去る馬車を目撃したとの証言があり、屋敷の護衛達に後を追わせています」

リジットの報告を聞いたファイスタークは、シアンをそっと離して立ち上がった。

「私も出るつ。ここを頼むぞ！」

そう言うや否や、数人の護衛を引き連れ、屋敷を飛び出したのだった。



「さつさと黙らせろッ」

ティアの盛大な泣き声は、窓ガラスを割らんばかりに響き、男達はたまらず耳を塞いでいた。

（まだまだあ。腹式呼吸を駆使した泣き声を甘く見ないでよ？ 喉を痛めないプロの技なんだからっ）

日頃のストレスを全て発散させる勢いで、ティアは泣き声を上げていた。

声量百パーセント、涙二十パーセント。つまりほとんどの涙泣きだ。

「何をしている？ さつさとそのガキを捨ててこいつ」

（捨てるですって？）

ヒュースリー伯爵の子どもを攫えと命じておいて、捨てるだなんてとんでもない。その上、どこかにいるかもしれない、ティアの兄を狙つた犯人なのだ。野放しになどできるはずがなかつた。

（もういいわ。精霊ちゃん達、全員逃がさないようにノシちゃつて）

《《まかせてっ》》

その時、突如として部屋に竜巻が発生した。

これには、さすがのティアも驚く。

《しょれえつ》

『かいてえんつ』

『パワーちゅうにゅうつ』

あつという間に、部屋の屋根が吹き飛ばされた。誘拐犯一人とその親玉が竜巻に巻かれ、声もなく振り回されている。その周りでは、十人以上の精霊達が楽しそうに舞っていた。どうやら火と風の精霊達のようだ。

『無事でございますか?』

その声に、ティアはふと顔を上げる。

いつの間にか風の精霊王——風王の腕に抱かれていたのだ。

(大丈夫よお。ふふつ、精霊ちゃん達、楽しそうだね)

『少し、はしやぎすぎです……』

(いいよ。怒らないでやって。でも、そろそろいいかな)

『そうですね。ちょうどいらしたようですし』

なんの事かとティアが風王に尋ねようとした、その時。

父フィスタークが、数人の護衛を連れて飛び込んできた。

「ティアっ!」

(あれ?
本当にお父様だ)



なぜここが分かつたのだろうと、ティアは不思議に思う。

答えを求めて風王の顔を見上げると、彼女は微笑みながら事情を話してくれた。
 『土の精靈王に頼んで、馬車の車輪の跡を分かりやすくしてもらいました。そのおかげで、難なく辿り着けたようですね』

（そつか、ありがとね）

ホツとするティアを、ファイスタークは呆然と見ていた。

竜巻に振り回される犯人達など眼中にならないらしい。

「あう？」

どうしたのだろうかと、ティアはコテンと首を傾げる。それでも反応がないファイスタークを見て、ティアはようやく気付いた。

（あっ！ 多分、お父様には私が浮いてるように見えてるんだよ。ねえ風王、姿を見せられる？ 精靈王ならできるって、前に言ってたよね？）

『はい。なるほど……気付かず申し訳ありません』

その直後、ティアを抱きかかえた風王が、ファイスタークに姿を見せた。

「なつ!?」

ファイスタークは、突然その場に現れた美女に驚き、目を見開く。

『わたくしは、風を司る精靈です。あなたのお嬢様は、我らにとつて大切な姫。陰ながら、お護りしております』

「え？ あ、それは、ありがとうございます……？」

混乱するファイスタークと、穏やかな笑顔で告げる風王。

ファイスタークの方がティアの保護者なのに、なんだか立場が逆になつたようだ。

『この度の事で、姫に怪我はありませんでした。ですが、大切な姫の部屋に無法者の侵入を許すのは、いかがなものかと』

「は……」

『以後このような事がないよう、わたくし共も気を付けましょう』

「はっ、今後はないようになります！」

そう言つて、ファイスタークは素早く敬礼した。

（お父様、敬礼は必要ないんだけど……。風王……もしかして機嫌悪い？）

『少し』

（ああ、そう……）

ニコニコと笑みを浮かべている風王だが、若干黒い風を纏つていた。

誘拐事件から二日後。

もう一人にさせてもらえないのではないかとティアは心配していたが、それは杞き憂に終わった。あれからも、相変わらず一人の時間は確保されている。

それはなぜかといえば、精霊王達のおかげだ。

彼らはある日、ティアが眠った後、ファイスタークと話し合ったという。

『我らにとつて、姫はかけがえのない存在です。お食事の用意はできませんが、他のお世話は、全て我らでいたします。ですから、常に姫と共にいる事をご了承ください。もちろん、あなた方が部屋にいらした際、必要とあらば姿をお見せします。いかがでしょうか?』

……こんな感じで、押し切つたらしい。

本来、伯爵家の子どもを一人にするのはあり得ない事だ。しかし、今まで一人の時間が多々あった。

その理由の一つは、母シアンだ。シアンは体が弱く、体調のいい日にしかティアの面倒を見られない。

ならば、乳母に世話をさせればいいと考えるのが普通だろう。だが、この伯爵家に乳母はない。シアンの体調が悪い時、ティアの世話は屋敷のメイド達が持ち回りでて

いる。

そうなつたわけを、ティアは風王から聞いた。

(つまり、お兄様の時の乳母が揃いも揃つて悪かつたから、私には乳母をつけないようになしたつて事?)

『はい。お兄様の乳母は、お兄様が三歳になるまでに九回代わりました。その全ての乳母が、お兄様を連れ去つたのです』

風王は、この辺りに長くいる精霊達から、過去の情報を集めたという。

(連れ去つたのです……つて『連れ去ろうとした』じゃないんだ……)

『お母様譲りの美しい金髪に、翡翠のごとき瞳をしていらして……見た瞬間、『まるで

天使のようだ』と誰もが呟いたとか……』

(天使? あのカラントとかいうクソ天使みたいな? うーん……それは……連れ去りたくなる……かも……?)

そんな赤ん坊なら、確かに連れ去りたくなるかもしれない。だが、十人もの乳母が誘惑されたとなると、さすがに異常だ。

(なるほどねえ……だから私には乳母がないんだ。それにしても、お兄様……会つてみたいわあ。今回の誘拐犯達も、お兄様が美少年だから狙つたの?)

風王ならば、その辺りの情報もぬかりなく集めているだろうと、ティアは確信していた。

『いいえ。今回の事は、お父様を妬む貴族の仕業でした。単純に、子どもを誘拐する事

で、嫌がらせをしたかったようですね』

ティアは納得しつつ、なぜ兄に会えないのかと疑問に思った。

『いいえ。今回の事は、お父様を妬む貴族の仕業でした。単純に、子どもを誘拐する事

で、嫌がらせをしたかったようですね』

（お兄様つて、どこにいるのか分かる？）

そのティアの問いかけに、風王は綺麗な顔を曇らせた。

『それが、引退なさった前伯爵——つまりティア様のお祖父様のところにいらっしやる
そうで……。何度も連れさられたせいで、心に傷を負ったのでしょうかね。すっかり人嫌
いになられたらしく、人の少ない田舎の別邸で暮らしていらっしゃいます』

今年で十歳になる兄は、五歳の時からずっと、両親に会っていないらしい。それなら
ば、ティアが会えないのも納得がいく。

両親が兄の存在を一度も口にしなかつたのは、最愛の息子を誘拐された過去を思い出
したくなかったらだろう。

（そうなんだ。……あ、まさか、お兄様の事があつたから、私の存在は公にされてな
いとか？）

『はい。どうも、お祖父様にすら伝わっていないようです。ティア様の存在を公にされ
ば、誘拐されるのではないかと、ご両親は警戒していらっしゃるのでしょう』

この屋敷の使用人達は、父の信頼が厚く、屋敷の内情を口外する者は一人もいない。
だからこそ、ティアの存在はこれまで知られずに済んだのだろう。

（でも、誘拐犯達も間抜けよね？ 今年十歳になる子どもと、赤ん坊を間違えるなんて）
『恐らく命令の仕方が悪かったのでしょう。雇い主は『子ども』という曖昧な情報しか
与えなかつたようですから』

（じゃあ、雇い主が間抜けだつたって事ね）
『そうですね』

そんな結論に至つたところで、今回の誘拐騒動の幕が下りたのだつた。



その頃、とある貴族の屋敷にて。

ティアに間抜けと評された男が、部下からの報告を受けていた。

「どういう事だ？」

男は苛立ちも露わに部下を問い合わせる。

「それが……失敗したとの事で、実行犯達は捕まってしまいました」

あまりにも情けない顛末を聞き、男は苦々しい表情でテーブルを何度も叩く。

先日、彼は『ヒュースリー伯爵の子どもを攫え』という命令を下した。

その相手は、ちんけな盜みや殺しを請け負う小者達。住む家がなく、日々食うに困っているような奴らだ。

仮に彼らが捕まつたとしても、男の素性が漏れる事はないだろう。彼らとのやり取りは、『ヒュースリー伯爵の子どもを攫え』と書かれた小さなメモの受け渡しだけ。彼らは雇い主である男の正体を知らなかつた。

とはいって、計画が失敗したというのは紛れもない事実だ。

「ふん、まあいい。いずれまた機会があるだろう。……下がれ」
部下が出ていき、男は部屋に一人になつた。彼は椅子に深く身を沈め、目を閉じて考える。

時を置かずして行動を起こせば、男の仕業だと勘付かれるだろう。今後は、もっと慎

重に動かなくてはならない。

（なに、計画の段取りを少し変えればいいだけだ。『あのお方』も分かつてくださるだろう）
男は、ヒュースリー伯爵領が平穏で、他の領地に比べて繁栄している事が許せなかつた。
自分と思いを同じくする、『あのお方』。全ては彼の方のためにと、男は次なる策略を練るのだった。



ティアは夢を見た。それは、サティアとして生きていた頃の夢。

覚えている中で最も古い記憶。あれは三歳の時だ。

サティアの母マティアス・ディストレアを王妃と認めない貴族達。彼らの手によつて、サティアは一度、誘拐された。

城の庭園で遊んでいたサティアは、メイドからマティアスが呼んでいると言われた。

そのメイドに連れられて行つた先にいたのは、見知らぬ貴族の男。その後、サティアは口に布を当てられ、意識を失つた。

その頃のサティアは貴族達の思惑も、マティアスを取り巻く事情も知らなかつた。だ